

一

次の各問いに答えなさい。

問一

次の――線部の、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 皮革製品を購^{こうにゅう}入する。
- ② アルコールは揮^き発性がある。
- ③ 後白河法皇について調査する。
- ④ 大切な人の言葉を深く心に刻^きむ。
- ⑤ 処^{しよ}世術を学ぶ。
- ⑥ 暴風警報がカイジヨされる。
- ⑦ ピアノでエンソウする。
- ⑧ 式典に校長先生のリンセキをたまわる。
- ⑨ あの人^{ひと}はドキヨウがある。
- ⑩ エンドウで駄伝の見物をする。

問二

次の漢字について、あとの各問いに答えなさい。

勤

- ① 部首にあたる部分をぬき出して書きなさい。
- ② 総画数が同じものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 張 イ 敬 ウ 絹 エ 遠

問三 次の四字熟語の意味として正しいものを、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

馬耳東風
ばじとうふう

ア 好きであればどんなことでも気にならないこと。

イ さわやかな風が吹く春の光景のこと。

ウ 人の意見や忠告を平気で聞き流すこと。

エ 何が起こってもまったく気にしないこと。

問四 次の熟語と組み立てが同じ熟語を、あとのア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 洗顔 ② 創造

ア 城内 イ 長短 ウ 不安 エ 降車 オ 雷鳴 カ 進行

問五 次の文を単語に分けた場合、いくつに分けられますか。単語の数を数字で答えなさい。

・学校の中から生徒の声が聞こえていた。

問六 次の文の——線部が修飾している文節をぬき出して書きなさい。

・すばやく、彼の提案した考えに賛同する。

問七 次のア～エから、言葉の使い方が正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

虫がいい

ア 試合でライバルを負かして、兄の虫がいい。

イ 洗濯物をほすのに、虫がいい天気だ。

ウ 努力せず結果を出すというのは、虫がいい考えだ。

エ 誰からも手本となるような虫がいい態度をとりなさい。

問八 次の文の「に」と同じ意味・用法で「に」が用いられている文を、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

・すでに商品は値上がりしている。

ア 兄が静かに帰ってきた。

イ 彼は悲しそうにうつむいた。

ウ この問題はじつに難しい。

エ 午前十時に集合だ。

【二】 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問いの中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

メディアの鉄則で、「両論併記」という言葉がある。新聞社に入ったばかりの駆け出しの記者は、先輩たちにまずはこの鉄則を教え込まれる。

両論併記の意味は、対立する人や組織などを記事でとりあげるとき、その片方の人や組織の言い分だけでなく、双方の意見を同じ分量だけ呈示するというルールだ。新聞だけじゃない。テレビ報道においてもこの鉄則は基本の一つだ。

でも、実は大きな落とし穴がある。

A⇔B

① この構造は確かにある。そこまでは正しい。でもAに対立するものがBであることは、いったい誰が決めるのだろうか？ もしかしたらCかもしれないし、Dの場合だってあるかもしれない。

対立点を決めるためには座標軸を設定しなければならぬ。誰かが決めるのだ。そしてそれはその誰かの主観。それともうひとつ。このルールには本質的な矛盾がある。仮に二つの意見を並べたとしても、その並べ方で印象はだいぶ違う。

A 原発はもう必要ない。コストも実は高いうえに、もしも事故が起きたら取り返しがつかない事態を招く。ある程度は電気料金の負担が大きくなったとしても、日本はできるだけ早く脱原発を実現すべきだ。

B 二酸化炭素問題を考えても、原発はやはり必要だ。なくすことで財界への打撃も大きい。電気料金の高騰で生活への影響も見逃せない。安全には最大限の配慮をしながら、一日も早く再稼働を目指すべきだ。

対立するこの二つの意見を、あなたはいま、A、Bの順に読んだ。では次に、順番を変えてB、Aの順に読んだ場合、自分がどんな印象を受けるかを想像してほしい。きつと微妙に違うはずだ。

Aの意見を紹介してから、これに反対するBの意見を紹介する。理屈としては、これで②となる。でもこの場合、後から出したBのほうが、視聴者や読者の共感を呼び起こしやすい。なぜならば、Aは途中経過でBは結論に近いという心理作用が働くからだ。

【I】 テレビのディレクターや新聞の記者たちは、本能的にこのメカニズムを知っている。だから③これを無意識に利用する。例えばスーパーで万引きしたとして、森という名前の(自称)映画監督・作家・大学教授が逮捕されたとする。目撃者も大勢いる。でも森は冤罪を主張している。この逮捕は警察のフレームアップ(でっちあげ)であるとまで言っている。テレビのニュースでこの事件を扱うとき、中立公正なメディアの立場としては、森の言い分をまったく紹介しないわけにはゆかない。ただし森の主張がニュース映像の最後に登場することはまずない。その主張を紹介してから、それとは反対の立場である警察や目撃者やスーパー店員などの主張で終わる。だからニュースを見終えた視聴者は、あとから登場した主張のほうが正しいかのような気分になる。つまり森は有罪だ。

【ア】 なぜこんな順番になるかといえば、自称映画監督・作家・大学教授である森の主張に正当性があると思う人は、明らかに社会の少数派だからだ。やっぱりあいつはその程度の奴だったのかと思う人のほうが多い。そしてテレビは基本的には多数派の願望に抗わない。なぜなら抗うと視聴率が落ちるから。それにもしも森のほうを支持するかのような印象を持たれたら、視聴者から抗議が来るかもしれない。局の偉い人がその抗議のことを聞いたなら、そんな問題を起こすような報道をするプロデューサーやディレクターは重要なポジションに置いてはおけないと判断するかもしれない。スポンサー企業の担当者が抗議の件を耳にしたら、もうスポンサーは降りると言い出すかもしれない。

【イ】

【II】 テレビが他のメディアと大きく違う点のひとつは、このスポンサーの存在がとても大きいことだ。新聞や雑誌は、基本的には(広告ページも若干あるけれど)それを読む人から料金をもらう。A 市場から対価を受け取る。B テレビは、(CSやWOWOWなどは例外として)視聴者から料金をもらわない。代わりにCMのスポンサーである企業から広告費を受け取る。だからス

ポンサーの意向をとて大事にする。

福島第一原発が事故を起こしたあと、東京電力とメディアとの関係がいろいろと問題になった。少なくとも事故後については、僕は問題になるほどの癒着はないと思う。でも事故前であるならば、確かに大手電力会社に対しての遠慮や癒着や忖度は、少なからずあった。実際にテレビの側にいたから、それは自信を持って断言する。何しろ東京電力は大手電力会社だ。広告出稿量も桁外れに大きい。要するに大スポンサーだ。

C 通常の番組と報道番組は違う。ネットなどではよく、報道番組もスポンサーとの関係があるから自由な意見を封じられている的な書き込みを目にするけれど、ネットで書かれているほどではない。スポンサーからのプレッシャーがまったくないとは言わないけれど、これに抗おうとする志の高い報道記者やディレクターは少なくない。僕も何人も知っている。ただしテレビ局総体としては、確かにスポンサーの意向を気にする。

【ウ】

Ⅲ テレビは社会の多数派に抗わない。なぜなら抗えば、視聴率が落ちるからだ。テレビほどではないけれど、新聞や雑誌など、すべての商業メディアにもこの原理は働いている。

つまり多数派の意見が、テレビなどマスメディアを通してさらに大きく社会に伝えられる。ということはメディアの影響を受けて多数派がさらに増える。そしてメディアは、またその多数派の意見を優先的に伝える。

この連鎖が際限なく起こる。メディアを媒介にしながら、多数派の主張や意見は雪だるま式にどんどん大きくなり、^④少数派の主張や意見は急速に小さくなる。

【エ】

例えばベストセラー。人気商品。あるいはブームやトレンド。これらはこうして発生する。最初はそれほどでもない。でもメディアが大きく報道する。それによって読んだり聞いたり買ったりする人が増える。人気スポットなども同じ。そもそもは知る人ぞ知る場所だった。でもテレビで隠れた人気スポットとして大きく放送された。それを観た人たちが押しかける。だから今度は、大人気のスポットとしてテレビなどが紹介する。それを見た人たちがまた……。

Ⅳ ここまでの説明は、本や音楽などのベストセラー、あるいは今のトレンドやブームなどについてだ。でもメディアの影響はそ

れだけじゃない。国民の意見や感覚なども同じように形成される。

つまり民意だ。あるいは世論。

最初は「何か変だな」と思っていた人も、それを当たり前だとする人たちがどんどん増えるので、その思いを口にしづらくなる。やがてはその人自身も、何度もメディアから同じ情報を見たり聞いたりしているうちに、その「変だな」という意識がどんどん薄くなってしまう。

ドイツがナチスの一党独裁になる過程で、「彼らは危険だ」と訴える人は、最初の頃はかなりいた。ユダヤ人を迫害したり拘束したりすることに、「同じ人間じゃないか」と反対する人もかなりいた。でもナチスの権力が強くなると同時に、メディアによるプロパガンダでこれを支持する人が急激に増えてきて、^⑤そんな人たちは沈黙した。あとはもう、暴走するばかりだった。

こんな現象を社会的には「沈黙の螺旋」という。こうして民意が形成される。本当は6対4くらいなのに、結果として8対2や9対1になってしまった民意だ。でもその過程で、メディアや集団のバイアスが働いたとは誰も思っていない。自分の自由意思だと思っている。

V ならばメディアはどうすべきなのか。もちろん、情報はこれを伝える人の主観から逃れられないのだとまずは自覚したうえで、できるかぎり中立であるべきだし、公正な位置を目指すべきだと僕は思う。報道はそうあるべきだ。でも実際には、絶対的な中立や客観などありえないときちんと自覚しながら日々の仕事をしている記者やディレクターは、僕の知っている範囲では少数派だ。もちろん中には、必死に考えている人もいる。でもそういう人は、どちらかといえば出世できない。^⑥なぜなら視聴率や部数を上昇させることを優先して考えることに、どうしても抑制が働いてしまうからだ。出世できるのは、そんなことはあまり考えずに、どうやったら視聴率や部数上がるだろうかと毎日考えているような人が多い。

悔しいけれど、これは大人の社会のある意味の断面だ。

Ⅵ だからあなたには知ってほしい。メディアはそんな本質的な矛盾を抱えている。中立公正で客観的な報道など、ありえない。必ず人の意識が反映されている。見たり読んだりする側もそれをつねに意識すること。そうすれば、同じニュースでも、これまでとは違って見えるはずだ。

(森達也『たったひとつの「真実」なんてない』による。問題作成にあたり、一部を改変しました。)

* 冤罪 〓 無実の罪。

* 忖度 〓 他人の気持ちをおしはかること。

* プロパガンダ 〓 宣伝。特に、政治的意図をもって行われる主義・思想などの宣伝。

* バイアス 〓 かたよった傾向^{けいこう}。

問一 A 〓 C にあてはまる言葉として適切なものを、次のア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア それから イ ところで ウ つまり エ だから オ ただし カ ところが

問二 次の一文は本文中のどの位置に入りますか。本文中の【ア】～【エ】から選び、記号で答えなさい。

テレビが視聴率をこれほど気にする理由は、それが企業からもらう広告費に換算^{かんさん}されるからだ。

問三 この文章に見出しをつける場合、どのようなものがよいですか。適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア メディアは本質的な矛盾を抱えている イ メディアはどうすべきなのか

ウ メディアは情報を利用している エ メディアは多数派に抗わない

オ メディアの情報には正当性がない

問四 この文章を大きく三つに分けるととき、第二、第三の部分はどこから始まりますか。本文中のⅠ～Ⅵから選び、番号で答えなさい。

問五 線部①「この構造」とはどのような構造ですか。説明しなさい。

問六 ② にあてはまる言葉を、本文中から四字でぬき出して書きなさい。

問七 線部③「これを無意識に利用する」とありますが、テレビのニュース番組のディレクターの場合は、どのようなことに利用するのですか。「視聴率」「報道」という言葉を使って、三十字程度で答えなさい。

問八 線部④「少数派の主張や意見は急速に小さくなる」とありますが、どうしてそのようなことになってしまったかということについて説明している段落を本文中から探し、初めの三字をぬき出して書きなさい。

問九 線部⑤「そんな人たち」とは、どのような人たちを指しますか。十五字以内で答えなさい。

問十 線部⑥「なぜなら視聴率や部数を上昇させることを優先して考えることに、どうしても抑制が働いてしまうからだ」とありますが、「抑制が働いてしまう」理由として適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 特定の情報を優先的に伝えることは客観的な報道とは言えないから。

イ 視聴率や部数を気にすることは出世を気にすることではないから。

ウ 情報はそれを伝える人の主観からは逃れられないものだから。

エ メディアがどうすべきかを考えているのは少数派に過ぎないから。

問十一 本文で説明されていることに合っているものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 対立する複数の意見を公正に扱うということが、メディアの鉄則である。情報は伝える側の主観からは逃れられないものの、メディアは正しい意見が見る側に伝わるように可能な限り公正な位置を目指すべきである。

イ 絶対的に公正な立場による報道などはありえないと確信する人間が少ないので、メディアの報道に大きく期待することはできない。そのため、情報の受け手が報道に対して批判的な意識を持つことが大切である。

ウ 「沈黙の螺旋」現象に見られるように、メディアは実際の国民の意見や感情とは異なる民意を形成するものである。メディアからの情報を見たり読んだりする側の人間は、ナチスの例などからその危険性を認識する必要がある。

エ メディアは公正さを保つためのルールを作って努力してきたが、報道には必ず主観性が入りこむ。メディアがどれほど多数派にかたよらない報道を目指して努力したとしても、客観的報道を実現させることは不可能である。

オ 商業メディアが広告費によって成り立つものである以上、視聴率は無視できない。視聴率よりもメディアはどうすべきかというこの方を真剣に考える人たちがあまり出世できない状況は、現実として受け入れなければならない。

三 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問いの中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

静子は、「ばか」という言葉について調べたいと思った。

「広辞苑、一寸お借りできるかしら」

ダイニングのテーブルの上に原稿を広げている嫁の薫子に、そう聞いた。薫子は、翻訳小説の下訳の仕事をしている。

「広辞苑。えーと、どこだったかしら。あ、そこです、その棚」

冷蔵庫の横の、電気釜やオーブントースターが置いてある棚の上段に、料理のレシピ本と一緒に立っていた。

「ごめんなさい。すぐ返すわね」

「いいんですよ、ごゆっくり」

「ありがとう」

静子は居間のソファに座って、広辞苑をめくった。日よけの簾越しに、庭の旺盛な緑が見える。一年と少し前、息子夫婦が静子と同居するために借りてくれた一軒家は、築二十八年というオンボロで、駅からも遠いが、周囲はふんだんな自然に恵まれている。

ばか【馬鹿・莫迦】

- 1 おろかなこと。社会的常識に欠けていること。また、その人。愚人。あほう。
- 2 取るに足りないつまらないこと。無益なこと。また、とんでもないこと。
- 3 役に立たないこと。

あら、いいじゃない。静子は思う。とくに「②」が気に入った。

静子は広辞苑を台所の棚に戻しにいくと、

「それじゃ、プールに行ってくるわ」
と薫子に告げた。

「あら……今日、プールの日でしたっけ？」
薫子は微かな動揺を見せた。

「ええ、そうなの。これから週に二回行くことにしたの」

静子は微笑む。嫁がさらに何か言わないうちに、「それじゃあ、ね」と背中を向けた。

駅までは遠いが、バス停までは五分で、そこに来るバスに乗れば、たいていのところへ行ける。

日盛りの下のベンチには座らず、ひんやりした石垣にもたれて、小粋な黒のつば広帽子で胸元を扇ぎながら、「たいてい」どころじゃないわ、どこだって行けるわ、と静子は思う。行きたいところにはどこだって行ける。

実際、行こうと思えば、アメリカにだって、南極にだって行けるだろう——行こうとは思わなくてもいいけれど。お金の問題もあるけれど。とにかく、バスという交通手段の意外な便利さ（それは静子にとってだけのもので、息子の愛一郎はこの地の不便さと、それを③軽視していた自分をいつも嘆いている）に気づくのとほぼ同時に、静子は④そのことに気づいたのだった。そんなにも万能な場所に、自分が今立っていることにはいまだ驚きがあり、興奮を覚えた。

バスはすぐに来た。どの路線もフィットネスクラブの前を通るし、十分足らずで、クラブの真ん前の停留所まで運んでくれる。ドア・ツー・ドアみたいなのでしょう？　ひと月ほど前、水泳を習うためにフィットネスクラブに通いたい、と宣言したとき、家族を説得するためにそう言った。

勿論、ほかにもいろいろ言った。⑤昼間のフィットネスクラブに来ているのは、ほとんどが静子のような老人であること（一寸嘘）。入会の前にはクラブ専属の医師による健康チェックがあること（これは本当）。七十歳以上はシルバー会員で、月会費が安くなること。勿論お金は静子の年金から、余裕で賄えること。

家族が難色を示していたのは、主に「その年で水泳なんて、危険すぎる」という理由からだったが、最後まで反対していた愛一郎も、結局は折れた。それはそうだ。当然だ。だって私は、もう、どこにだって行ける生きものに生まれ変わったんだもの、と静子は思う。

広々した清潔なロッカールームで、静子は、⑥すみれ色の水着に着替えた。

静子の身長は、最後に——あれは何十年前だったのだろう——測ったときは百五十五センチ、ふわっと太っていて色白で、緩くパームをかけて短めに揃えた髪の毛は、もうすっかり真っ白になっている。すみれ色は、そういう自分のプロフィールに合わせて選んだ。

この前、ロッカーの向こうから、静子の噂をする声が聞こえてきた。静子はびっくりしたが、悪口ではなかったから、喋っている人たちは声を潜めようとも考えなかったのだろう、と理解した。

あのおばあさんなんか、ぜったいにうちの母よりも上よ。どのおばあさん？　ほら、初心者クラスにいる、すみれ色の水着の人。ああ、あの可愛いおばあさんね……。

迷うところではあったのだが、静子はとりあえず、気を良くすることにしていった。

半地下にある二十五メートルプールは、天井の明り通りの窓から、光が縞模様に入ってくる。六コースのうち端の二コースを使つて、コートによるスイミングレッスンが毎日行われている。

今までは月曜日午前の初心者クラスにだけ出ていたのだが、これからは水曜日にも通うことにしたというわけだった。水中でコーチを待っているメンバーは十人ほどで、月曜日のクラスで知り合った顔見知りも四、五人いる。静子が入ってきたのに気づいて、「宇陀川さん」と口々に呼んでくれる。なにしろ静子は「可愛いおばあさん」なのだから、みんなが親切にしてくれる。

「さあ、それではいつものように、イルカ飛びからまいりましょう」

コーチは三十歳くらいで気の毒なほど⑦腰が低くて、静子の印象だと「売れない漫才師」みたいな感じの人だった。ピツと笛が鳴り、ひとりずつ水中に身を投げる。

イルカ飛びの行進だ。まず水中に立ち、イルカのジャンプの要領で水の中に頭から突っ込んで、プールの底すれすれまで沈んだら、身を反らせてすつと浮かんで、立つ。その繰り返しだ。だから⑧「身を投げる」というのは少々大げさではあるのだが、静子には実際、毎回——プールの端まで行くのに八回のイルカ飛びが必要だとするなら、八回——まぎれもない⑨投身の実感があつた。

もともと、水は大の苦手だった。静子が子供だった時分、東京の学校には水泳の授業なんてなかったし、結婚してから家族で海水浴に行ったときも、波打ち際に足を浸してみるのがせいぜいだった。

それが去年、町内会のバス旅行に参加してみたら、ホテルに温水プールがついていて、どうしたはずみか、試してみる気になった。^⑩バス旅行はその一回かぎりでこりこりしたが、水中の魅力にはすっかりとられてしまったのだった。

水中はすばらしい。

静子にとって、水中は、この世のものではない天候、みたいなものだった。晴れでも曇りでも雨でも雪でもない、非現実的な空。静子はまず、その感触をぞんぶんに味わい、興奮し、少しだけ怖くなって、それから、現実の世界に無事生還できた安堵と確信に充たされる。

イルカ飛びの一連の動作をする、ほんの数秒の間にさえ、それだけのことが起きる。静子はまだ、五メートルと泳げない(実際のところ、それは泳ぎともいえない)のだが、このクラスの最終的な目標である二十五メートルを本当に泳げるようになったら、さらに、五十メートル、百メートルと泳げるようになってしまったら、いったいどんな感じがするものだろうか、と^⑪する。

「宇陀川さん、たいへんけっこうですよ。ほんとうにイルカみたいに見えましたよー」

静子がプールの向こうの端まで行き着くと、すかさずコーチがほめ、ぱちぱちと拍手が起きた。

プールとロッカールームとは、ひみつの抜け穴みたいな渡り廊下で繋がっている(つまりそこは、水着を着た人しか通れない仕組みになっている)。

渡り廊下の入口には足拭きマットとガラスのドアがあり、そのドアに、前回まではなかった貼り紙があった。

⑫

これで何枚目になるかしら、と静子は思う。フィットネスクラブというのはそういうものなのか、このクラブにかぎったことなのかは知る由もないが、とにかくこの種の注意書きは、建物のあちこちに貼ってある。

曰く、洗面所はきれいに使いましょう。冷水器でうがいをしてください。サウナの中では静かにしましょう……。

町内会のバス旅行にうんざりしたのは、何でもかんでも決められた通りにしなければいけなかったからだが、残念ながらこのフィ

ットネスクラブにも、一寸似たようなところがある。

——が、静子は勿論、髪をごしごし拭いた。濡れた場所から乾いた場所へ入るときは、体の水気を拭わなければならないことくらい、三歳の頃から知っている。

ばかみたいだね。

注意書きに向かつて、ほとんど言い聞かせるように、心の中でそう呟いた。注意書きを見る度、あまりにも頻繁にその感想が浮かぶ。それが今朝、「ばか」を辞書で調べた理由のひとつだ。

「あ、宇陀川さん、お疲れさまー。帰り、お茶して行きませんかー？」

浴室の前で立ち話していた数人に、声をかけられた。薫子と同じ年頃のグループだ。

「ありがとう。ぜひ一緒にいたいわ。待っててね」

静子は手を振って、朗らかに応えた。

(井上荒野『静子の日常』による。問題作成にあたり、一部を改変しました。)

問一——線部①「旺盛な緑」と同じ意味で使われている言葉を、本文中から七字でぬき出して書きなさい。

問二——②には、本文に引用されている広辞苑の記述の番号が入ります。1～3のうち適切な番号を答えなさい。

問三——線部③「軽視していた」とありますが、これは「誰」が「何をする」にあたって「何」を軽視していたということですか。本文中の言葉を使って書きなさい。

問四——線部④「そのこと」とは何を指していますか。本文中から解答欄に合うように十五字以上二十字以内でぬき出して書きなさい。

問五 — 線部⑤「昼間のフィットネスクラブに来ているのは、ほとんどが静子のような老人である」とありますが、静子はそのように言ったのはなぜですか。二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問六 — 線部⑥「すみれ色」とは一般的にどのような色を指しますか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 桃色 イ 水色 ウ 紫色 エ 白色

問七 — 線部⑦「腰が低くて」の意味として、適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 人の機嫌をとうとうとしていて イ びくびくしていて
ウ 話がおもしろくなくて エ 他人に対してへりくだっていて

問八 — 線部⑧「身を投げる」というのは少々大げさではある」とありますが、本来「身を投げる」とはどういう意味ですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 命がけで取り組むこと イ みずから命を絶つこと ウ 全財産をつぎこむこと エ 相手にまかせること

問九 — 線部⑨「投身の実感」とはどのようなものですか。それをよりくわしく表している段落を探し、初めの三字をぬき出して書きなさい。

問十 — 線部⑩「バス旅行はその一回かぎりでこりこりした」とありますが、それはなぜですか。本文中から三十字程度で探し、初めと終わりの三字をぬき出して書きなさい。

問十一 — ⑪にあてはまる言葉として、適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア ひやひや イ そわそわ ウ わくわく エ はらはら

問十二 — ⑫にあてはまる「貼り紙」の言葉として、適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 大声での会話はご遠慮ください イ 髪をよく拭いてから通ってください
ウ 渡り廊下では走らないでください エ 足拭きマットをご利用ください

問十三 「静子」の人物像として適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 何ものにも縛られない生き方に目覚め、明るく生き生きと晩年を過ごそうとしている人物。
イ 明るいのは表向きだけで、辞書で「ばか」を調べて喜ぶなど暗く陰湿な性格を持った人物。
ウ 息子夫婦との同居を心から嬉しく思い、はしゃいでプールに通うなど可愛らしい人物。
エ 社交的な性格で、老齢に至っても水泳をはじめとしたスポーツを好む行動的な人物。

問五	問二	問一	
	①	⑥	①
問六	②		
	問三	⑦	②
	問四		
	①	⑧	③
問七	②		
問八		⑨	④
			む
		⑩	⑤

[illegible]

得	点